

昭和60年度日本気象学会山本賞の受賞者決まる

受賞者：山内 恭（国立極地研究所）

「Variations of Incident Solar Flux and Snow Albedo on the Solar Zenith Angle and Cloud Cover, at Mizuho Station, Antarctica」

（「気象集誌」第61巻（1983）第6号，879-893）

選定理由：南極は地球の冷源域の1つとして気候・気象に重要な役割を果しているが、南極大陸上における放射収支の精密な議論に利用できる測定結果は少ない。山内会員は、POLEX-SOUTHの一環として、1979～1981年にかけて、南極みずほ基地において精密な放射観測を行い、観測データの緻密な解析によって南極大陸斜面における放射収支の特長を明らかにした。

特に、雪面アルベドの波長特性、雲-雪面間の多重反射効果の定量的評価は、雪面上の放射収支過程の解明に重要な貢献をなすものである。この研究では、測器の詳細な検討と、精度向上に多くの努力が払われ、その測定結果は極めて高い品質をもち、南極の一地点の基礎放射データとしてのみならず、広域の人工衛星データの“Ground truth”として利用され高い評価をうけている。

本研究論文は、南極という過酷な条件下で、しかも高精度、良質の観測を行い、その結果を十分に解析したもので、南極における放射収支解明の重要な基礎資料とな

るもので、気象学の進歩に貢献すること大である。

以上の理由により日本気象学会は、昭和60年度山本賞を山内 恭会員に対して贈るものである。

受賞者：高橋正明（九州大学・理学部）

「A 2-dimensional Numerical Model of the Semi-annual Zonal Wind Oscillation」（「気象集誌」第62巻（1984）第1号，52-68）

選定理由：赤道域の上部成層圏から中間圏にかけては東西風が半年周期で規則正しく変化し、半年周期振動として知られている。1960年代後半、この現象が発見されてから、この振動のメカニズムについて多くの研究がなされて来たが未だ決定的解決に至っていない。

高橋会員は本論文においてこの問題にとりくみ、2次元数値モデルを作って日射加熱による平均子午面循環と東風生成の効果、赤道ケルビン波による西風加速効果、内部重力波の効果を取り入れたシミュレーションを行い、これらの効果によって半年周期振動が作られることを明瞭に示し得た。観測との一致は未だ完全ではないが、そのことによってプラネタリー波による東風加速も重要であることを指摘している。この研究は世界の先頭を行くすぐれた業績である。

以上の理由により日本気象学会は、昭和60年度山本賞を高橋正明会員に対して贈るものである。

澤田龍吉氏日本学術会議会員へ

日本気象学会理事長

本学会より日本学術会議へ届け出た会員の候補者および推薦人につきましては、天気32巻4号（25頁）で報告しましたが、その後の経過および最終結果は下記のとおりです。

記

1. 日本学術会議推薦管理委員会から、本会より届け出た会員候補・澤田龍吉本学会会員について、日本学術会議会員となる資格を有する者であると認定した旨通知があった（昭和60年3月28日、この件昭和60年度総

会において報告済み）。

2. 日本学術会議推薦管理委員長から、澤田龍吉本学会会員が、第13期日本学術会議の会員として推薦すべき者に決定され、内閣総理大臣に推薦された旨通知があった（昭和60年6月28日）。

3. 昭和60年7月25日付官報17537号に、「澤田龍吉、日本学術会議会員に任命する（7月22日）」旨掲載された。